34

平成13年10月5日

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ（三〇）

第七九則　長沙進歩

〔示　衆〕

衆に示して云く、金沙灘頭の馬郎婦、別に是れ精神。瑠璃瓶裏に鎡錤を擣くを、誰か敢えて転動す。人を驚かす浪に入らずんば、意に称う魚に逢い難し。寛行大歩の一句、作麼生。

〔本　則〕

挙す、長沙、僧をして会和尚に問わしむ。未だ南泉に見えざる時は如何ん。会、良久す。僧云く、見えた後は如何ん。会云く、別に有るべからず。僧、廻って沙に挙似す。沙云く、百尺竿頭に坐する底の人、得入すと然雖も未だ真とは為さず。百尺竿頭、須らく歩を進むべし。十方世界、是れ全身なり。僧云く、百尺竿頭、如何んが歩を進めん。沙云く、朗州の山、豊州の水。僧云く、会せず。沙云く、四海五湖、王化の裏。

「長足の進歩」という表現がありますが、今回はまったく似て非なる「長沙進歩」という公案。長沙和尚はここでは初登場で、長沙景岑（＊～八六八）さんのことです。この方は禅法を南岳―馬祖―南泉―景岑と承け、湖南省の省都である長沙市の岳麓山で道場を開いた英傑です。一匹オオカミの英傑たちは、みな地名や山名・寺名などで呼ばれるのが中国の伝統。

この人も、現在は人口六百万の大都市である「長沙」の名で呼ばれるのですから、推してしるべし。道元禅師も著作中で、長沙のことばをたびたび引いて拈提されているほどです。しかし、『従容録』では長沙をテーマとするのはこの一則だけ。それだけに貴重な公案といえます。

ところで、今回の本則はかなり長いので、スペースの都合から万松さんのコメント〔著語〕の部分は省略しました。もちろん、巻頭にある万松の〔示衆〕はそのままです。まずこれを、例によって意訳してみましょう。

「馬氏のもとに嫁いで教化をほどこした魚籃観音は、なんとすばらしい精魂なこと。だいたい、ガラスの器で餅をつこうとしても、誰も杵は動かせぬ。怒涛の浪に身を投じてこそ、ねらった魚はしとめられるというもの。こんな縦横自在なはたらきを示す一句は、果して何じゃろうな。」

おおむねこんなところ。「金沙灘頭の馬郎婦」とは、仏教が未開であった辺境の馬氏のもとに、美女に変じた魚籃観音が嫁いで教化したという故事。この故事のように立派な教化の活動を示すのが、ほかならぬ「長沙進歩」の公案だといっているのです。なお、「餻餻」とは粟餅のことです。

そこで〔本則〕をみましょう。

長沙和尚が会和尚のところに僧をつかわして、たずねさせた。僧「あなたが南泉さまに参じなかった以前の境地は？」会は黙ったまま。僧「参じた後は？」「別に変わったことはないさ。」僧は帰って長沙に告げた。長沙の詩「百尺の竿上に座ったまま、悟っちゃいるけど本物じゃない。竿の上から一歩を進めてこそ、全世界と一つになれるものを。」僧「どうしたら一歩を進められます？」「山はただ山、水はただ水。」僧「わかりません。」「いいかな、世界中がおのれの全身なんだ。」

おおむね、このような意味です。ここで長沙が僧をつかわした「会和尚」とは、同じ長沙市の東寺に住した著名な如会和尚ともみられています。しかし、如会は法系譜では長沙の叔父に当るのに、この公案では長沙が僧を使ってテストしたり、その結果を非難するなどいかにも不自然。その上、如会が南泉に参じたとする伝記史料は皆無。つまり、会と如会は別人です。

また、南泉はいうまでもなく南泉普願。並いる馬祖門下では百丈と共に大禅匠です。長沙はこの人に参じて鉗鎚を受け、法を嗣いだ。つまり会和尚とは修行仲間だったのです。ですから僧に聞かせたことは、南泉のもとでの悟境。ところが、参学の前後では何の変りもないという返事でした。

たしかに、悟りとは大宇宙の真理（法）を悟ることで、万法そのものをすなおに見聞できるようになるわけで、特殊な通力をもつことではありません。ところが悲しいかな、人間が始末に負えないのは執着。それを悟ったら悟りの世界に安住してしまった。そこで長沙が「百尺竿頭進一歩」という有名な一句を吐いたのです。これができれば、山も川も自分と一体になれる、というのです。

したがって、「百尺竿頭進一歩」がこの公案の眼目。ありがたいことに、道元禅師はこの言葉を何度も引いて説示されています。とりわけ『正法眼蔵随聞記』では、何度もこの語をとりあげて策励されます。その要旨は、出家でも在家でも名誉や地位や利益にとらわれ、我見で自分に都合の良い仏をつくり出していては、いくら修行をしても道は得られぬ。こんな我見を離れて百尺竿頭から一歩を進めて修行し、はじめて道と親しくなれるのだ、という説示です。

たしかに人は、金がたまるとエリート意識が生まれ、人間の価値を金銭ではかるようになり、名誉や地位や職位が高くなると、とたんにエラくなってしまう。大学の先生などは、一般に口先だけで心はキタナイ人が案外と多いのです。教員職は幼稚園の先生がいちばん立派で、上にゆくほど人格はダメ。高学歴・机上労働と人格の関係は、どうやら反比例なのですね。むしろ、身体を張って生業に励んでいる人ほど、誠実で寡黙、そしてあたたかい。だから、身についてしまったものを「放下著」しないと、仏道は本物にならない。

わたくしは以前、宗門の文化財調査で岡山県高梁市の定林寺で見た、狩野元信の描く衝立の虎図を忘れることができません。甘える子を口でくわえた親虎のなぜか悲しげな顔。ところが裏側を見て驚きました。竹林と千仞の谷！元信はまさに最愛の子を崖から投げ落す情景を描いたのです。その迫力たるや、四百余年の歳月を経て今なお鮮明。さすがは日本三傑の一人、元信の名作です。

虎でさえ、こんな生死の試練を経て一匹前？になるのです。それは虎の本能なのかもしれませんが、猛獣ながらみごとな試練。人間は身を危険にさらす必要はなく、また本能的な煩悩を断つことはできません。ですが、いつも自分を支配しているとらわれの心は、サラリと捨てさることが可能。するといつしか仏道は身につきます。それには常に道心を発すことであります。

狩野元信の虎図衝立（定林寺）

特集

仏教東漸の旅

玄奘三蔵は七世紀初めインドへ求法の旅におもむき、各地の大徳を訪ねて仏教の蘊奥をきわめ、多くの経典を携えて帰国しました。この玄奘三蔵の足跡をすこしたどろうという仏教東漸の八日間の旅が、参禅会有志によって企画されました。

敦煌莫高窟、安西楡林窟、玄奘三蔵が大衆に講義をした高昌故城、西遊記でお馴染みの火焔山のあるトルファン、新疆地域最大の石窟であるキジル千仏洞やベゼクリク千仏洞など、仏教の東遷を物語る遺跡を見ながらクチャまでの辺境の旅である。

龍泉院椎名老師をはじめ総勢一四名。今年は参禅会が始まって三〇年という記念の年です。記念行事はいろいろあるので非公式行事ということで実施されました。

仏教東漸の旅

沼南町　添田　昌弘

シルクロードに私はとうとうやって来た。長い間の夢であった。法顕が、玄奘三蔵が求法の旅に出掛けた。砂漠を通り、山々を越え、死都の廃墟を抜け、世界最高の峠の氷雪を越えて行った。法顕は『仏国記』で「沙河中に多くの悪鬼・熱風あり。逢えば即ち皆死して、一として生き物無し。上に飛鳥なく、下に走獣なし。遍望極目、度る処を求めんと欲すれば、即ち擬する処を知らず。唯、死人の枯骨を以って、標識と為すのみ」と。

玄奘三蔵は『大唐西域記』に「大流沙に入ると、砂は風にしたがって、流れたり、留まったり、あるいは集まったり、散ったりするので通った人の足跡も消え、ついに路に迷うことが多い。四方はるかに茫々として、方向が分からなくなる。そこで旅行にはその辺に残された遺骸を集めて目印にする。水も草もなく、しばしば熱風が吹く。風が起こると、人も動物も眼がくらみ、ノイローゼ気味となる。ふと歌声が聞こえたり、泣き声が聞こえたりする。これに惑わされて、自分のいる場所が分からなくなり、行方不明になったり、そのためしばしば生命を失う。思うにこれは妖霊のしわざであろう。」と書いている。

我々はこのような地を飛行機と汽車とバスで訪れた。玄奘三蔵は広漠たる熱砂のタクラマカン砂漠を越え、万古白雪を頂くパミール高原、白氷のカラコルム山脈を徒歩で横断した。今日の装備をしても容易ではないであろう。しかも帰国してから多くの経典の翻訳にあたった。

仏教が中国に渡来してきたのは後漢の章帝・和帝（七六～一〇五年）以後、班超が西域を定めて、東西の交通が大いにおこった頃である。仏教が多くの僧侶や経典の伝来によって、本格的に中国に広まり始めたのは、後漢末から三国以後のことであった。敦煌や西域が仏教の受容に重要な役割をしめたのであろう。

今回我々は安西の楡林窟、敦煌の莫高窟、吐魯番（トルファン）のベゼクリク千仏洞、そして庫車（クチャ）のクズルガハ千仏洞とキジル千仏洞の仏教遺跡を訪れた。仏教東漸の旅は我々の今回の目的である。

これらの仏像や壁画は何百年にも渡って造られたものである。それは強い信仰に支えられて造られたのであろう。過酷な砂漠のなかで生活しながら、そこには強烈な信仰があった。

しかし、我々が見たのは金を取って見せられた過去のものであった。現代に生きているものではない。たしかにウイグル地区はイスラム教圏である。仏像は眼をくりぬかれている。そこに今住んでいる人達には何の意味も無いものであろう。旅に出る前に報道されたイスラム原理主義タリバンがバーミアンの仏像を破壊した。

しかし攻撃的な自己主張をする宗教は、二一世紀を導く宗教たりえるのか。ニーチェは「神は死んだ」と言った。シルクロードの仏

安西楡林窟は荒地の谷間にある

像も遺跡として存在しているだけで、生きた仏像ではない。そこにはこれら仏像を何年もかけて造った信仰がない。それは日本の京都などにある観光寺院とまた全く同じである。信仰の対象ではなく金を集める彫刻物であり、絵画に過ぎない。昔の人達の強い信仰心から生まれたものが観光の材料とされていることに悲しい思いをした。

海から一番遠いところに沙の海があった。そのスケールと雄大な景観に圧倒された。砂漠といっても、その灰色の広がりは山あり谷あり、地形も複雑で、様相は千変万化、息を呑む感じである。ゴビ砂漠はモンゴル語で「人の定住しない土地」を意味し、沙ではなく砂利の原である。そこにラクダ草が生え、紅柳の草叢がある。はてしない原野の中にオアシスがある。中国語で緑州という。鳴沙山に行った。ここがまさしく我々のイメージしていた砂漠である。細かい沙の山で、砂に水分がなくサラサラとして踏ん張りがきかない。敦煌は昔、沙州と言った。天気も良く、ラクダに初めて乗った。穏やかな砂の原である。

私が今回の旅で一番感激したのは、目的とした莫高窟ではなく砂漠であった。

せっかく昔の人が残してくれた素晴らしい遺産の前を我々は通り過ぎて来た。法外なお金を払って我々に残ったものは何か。現代に生きていない像である。何か空しい思いが残った。

莫高窟第二七五窟の交脚弥勒像は敦煌の顔であると、井上靖氏は書いている。我々にいま何を語りかけているのか。

高昌故城

柏市　安本小太郎

枯れたラクダ草が点々と在る以外、何も無い砂漠を走るバス。右前方へ入道雲に似た塊が遠く見えてきた。高昌故城だ。

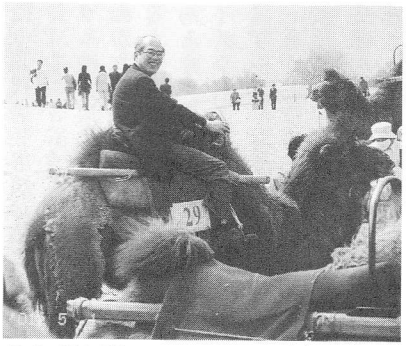
玄奘は七世紀前半、建国間もない唐の国禁を犯し、インドに向う。身丈七尺、二八才、瑜伽師地論の原典を求めての旅であった。

玉門関で痩せた赤馬一頭を買って共に歩んだ。空に飛ぶ鳥なく、地には走る獣もなしと表現されたゴビ砂漠。旅に倒れた人の白骨等を目印とした。途中、水を入れた革袋を落し二時間程引き返したが、思い止まり、以後は再び東には向わないと決意する。玄奘の旅は高昌国までが一番大変であったようだ。我々は、飛行機とバスでも楽ではなかった。

近づいてみると、高昌故城は日干しレンガを積み上げ、同じ赤土でその上を塗り、物見台、住居等としている。今は外の塗土が剥れたり、全体が崩れたりで三割方しか残っていない。年間雨量二〇ミリという降水量なので千三百年を持ちこたえているが、日本の様な降雨量では十年と持つまい。

高昌国王、麹文泰は玄奘の類いまれな仏教の素養に惚れ込み、何とかして、この国に留まらせようとするが、玄奘の決意は堅く、ついに半年後、馬、銀貨、絹布、通過国への紹介状、三〇余名の伴者等を与えて送り出す。インドの帰りに三年間高昌国に留まって、仏教を講じてくれる事を条件とし、玄奘も約束する。

インドに着いて、ナーランダ僧院で五年間学んだ玄奘は、帰路は楽で、経典も多く持ち帰れる海路を推められるも、麹文泰との約束を果すべく陸路をとり、途中天山山脈近くまで北上するが、高昌国


ラクダと聞いていたけれど（鳴沙山）

は唐に滅ぼされたと知り、天山南路に戻り、西安に帰った。

五月に入ったばかりの高昌故城は堅固な残骸を残し、気温三〇度というのに、乾燥のため暑さを感じず、うっすらと曇った空気がどこまでも続く砂漠の高台に存在した。

千三百年以上前にここを通ってインドに赴き、持ち帰った論書を元に翻訳された、成唯識論を学んでいる者として、あの乾いた風の中に、三蔵法師玄奘をより身近に感じるようになったシルクロードの旅であった。

沙中に仏と出会う

柏市　五十嵐嗣郎

今回の参禅会有志による仏教東漸の旅では、敦煌莫高窟やトルファンの火焔山や高昌故城など、いくつもの有名な仏蹟が含まれており、紀元二世紀から清代までの中国における仏教伝来の軌跡を辿るには、またと無い機会でした。

この中でも、ユーラシア大陸の真中に位置し、海から最も遠く離れている庫車(クチャ)は、シルクロードを代表する都市の一つです。

玄奘三蔵も二ヶ月余り滞在したこの街は、『大唐西域記』には亀茲国として紹介されています。昔から音楽と舞踏が盛んな所で、庫車で生まれた音楽は四世紀には長安に伝わり、遠く我国にも「雅楽」として伝わっています。正倉院にも、庫車で作られたと思われる楽器が保存されており、日本とのつながりは深いものがある。

さらに庫車は、翻訳僧として有名な鳩摩羅什の生まれた所でもあります。

私は今回の旅で、この庫車の街を訪れるのを楽しみの一つにしていました。シルクロードも庫車まで来ると、ウイグル族の人が多くなり、西域の雰囲気は一気に高まるものと期待していたのです。

荒涼たる風景がどこまでも続く

庫車周辺にはクムトラ千仏洞、キジル千仏洞、クズルガハ千仏洞、玄奘三蔵が大衆に説法したスバシ故城など、仏教遺跡の非常に多い所であり、古代シルクロードの真珠とも呼ばれています。その中でもキジル千仏洞を訪れた時の思い出は今でも強く残っています。

庫車の西北約七〇キロの所にあるキジル千仏洞までの道のりは、地平線がどこまでも続く砂漠の中をひたすら進んだ後、『西遊記』の妖怪が出てきそうな奇異な渓谷に入って行く。渓谷の岩は全て同じ方向に傾いており、その間を縫うように白い河が流れている。河の水分が蒸発し、塩の結晶だけが残って白くなったので、塩水渓谷と呼ばれていると、ガイドの趙さんが教えてくれた。

キジル千仏洞の「キジル」とは「赤い色」の意味で、ムザルト河北岸の断崖二キロにわたって、現在判明しているだけでも、二三六窟が穿たれた新彊地区最大の石窟です。

石窟保存には莫大なお金が掛ると思われるが、クズルガハ千仏洞から我々の車に同乗した若い仏教研究者の説明によれば、世界的遺産にも拘わらず中国政府からの援助は無く、観光収入と省政府からの援助に頼っているとの事でした。

キジル千仏洞に着くと鳩摩羅什の像が迎えてくれる。鳩摩羅什の像の前で全員の記念写真を撮ってから受付のほうに向かう。

笑窪がかわいい宋さんと言う若い女性ガイドに従って、断崖に取り付けられた急な木の階段をいくつも登って行く。ここでは一五くらいの石窟を見学しましたが、この内、第三八窟は、通常の見学コースに含まれていないので、別途百元の料金が必要となるのです。

第三八窟は楽天窟と名付けられ、四世紀ごろに造られたもので、横笛などの楽器を持った飛天が描かれている。その中でもひときわ艶めかしい飛天が、入り口の右上に見られた。宋さんによれば「クチャのビーナス」と呼ばれているそうで、当時のクチャにはこのような美人が多数いたのかもしれない。

ガイドの宋さんに「あなたは現代のクチャのビーナスだよ」と言うと、顔が真っ赤になり、かわいい笑窪がさらに大きくなった。

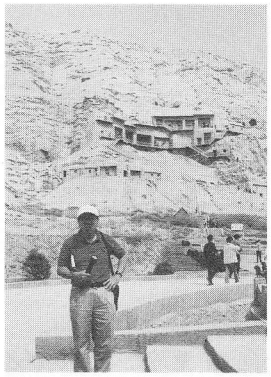
坐禅窟と呼ばれている第四九窟の中には、高さが三〇センチくらいで、一〇人ぐらい坐れる長さの単が作られていました。四世紀ごろの僧がここで坐っていたかと思うと、まさに沙中に仏を見る思い

がしました。

一〇世紀頃に起こったイスラム教徒と仏教徒の戦いにより、ほとんどの洞窟は破壊され、安置されていた仏像は今は無く、飛天の多くは顔を削られたり、目がつぶされたりして、痛々しい限りである。それゆえ、わずかに残された飛天たちを、なおさら美しいと感ずるのかもしれません。

仏蹟破壊は残念ながら現在でも世界各地で行われている。最近でも狂信的なイスラム教徒により、バーミヤンにある大石仏が破壊されたが、他宗教の文化を認める寛容な心を何故彼等は持てないのかと、怒りさえも覚えてきます（この原稿を書いている時に、彼等によるNY市の高層ビル破壊テロ活動が報道された。彼等は仏教遺跡だけではなく、世界経済の破壊までも引き起こすテロ集団にエスカレートしている）。

鳩摩羅什の像の前で



シルクロードに点在する石窟の壁画の内容は、仏陀の生涯を描いた本生譚や須弥山の模様や説法図、それに石窟が作られた当時の時代風景などさまざまです。これらの壁画を見ていると、インドから天山山脈を越え、タクラマカン砂漠を通り、中国へ確かに仏教が伝わっていったことが実感できます。

我々は、達磨大師が中国に来られて、初めて真の仏教が伝えられたと信じています。しかし、それまでに中国では、仏を信仰する土壌が営々と造られて来たからこそ、達磨禅が普及したのではないでしょうか。はるか昔、シルクロードのオアシスに生まれた人々の仏を求める熱い思いを、沙中に感じることの出来た旅でありました。

仏教伝来を辿る（三）

沼南町　松井　隆

今回の「仏教東漸の旅」に再度参加できたのも、偏に龍泉院参禅会のご縁であると感謝一杯でございます。

シルクロードは、前回の西安以西に連なる古代の交易路であり、さらには熱砂のタクラマカン砂漠の仏教伝来を辿るロマン溢れる路であります。その旅の感動の幾つかを記します。

トルファンとカレーズ

トルファンは、ウルムチから高速道路を南下すること約二時間のトルファン盆地に位置する町。シルクロードの要衝地でもあり、タクラマカン砂漠に位置しているが、ポプラの防風林で覆われた緑のオアシス都市である。そしてこの町では葡萄・ハミ瓜・綿花などが多く栽培され、土産店では干し葡萄を山に積んで販売しています。この町がこんなに緑豊かで、農産品が多く栽培できるのは、カレーズ（地下トンネル水路）による豊富な水があるからです。

カレーズは、世界の土木施設として注目され、遥か天山山脈の麓の地下水を約四～五〇m間隔に縦坑を掘りトンネルで結んで人力建設したものです。何とこのトンネルは古来から百本以上も地下に張り巡らされていた。厳しい砂漠環境を克服し、人々が強く生きる智慧をこの町で確認した次第です。

千仏洞（石窟寺院）

この旅では数多くの千仏洞を観た。その代表が敦煌の莫高窟（北涼期～元代、492窟）と安西の楡林窟（唐代～清代、43窟）であり、これらの窟建設、壁画、塑像等に各時代を読むことができる。また窟ごとにテーマが表現され仏教美術全体を構成している。壁画のテーマは、制作年代が古い前期のものには釈迦の生涯伝記を表した仏伝図や本生図（釈迦の生前における善行物語を表した図）が多く、また樹下説法図、飛天、供養図などが描かれ、天井には千仏がところ狭しと埋められている。

仏堂には塑像とともに劇画が描かれ、日本の寺院では見られない壮大・素朴な描写が強く印象に残った。唐代以降になると壁画のテ

右から椎名老師、添田氏、松井氏

ーマは経変（経典の内容を絵画化）が増えた。各壁画の内容は「砂漠の画廊」として今日最大の仏教美術遺産であろう。

この他、トルファン地区最大石窟の高昌故城から二〇キロに位置するベゼクリク千仏洞（現存六四窟）、クチャ周辺のキジル千仏洞（七四窟）、クズルガハ千仏洞（四六窟）の石窟など、貴重な仏教文化をタクラマカン砂漠の東西約一二〇〇ｋｍにわたって探索した。かの鳩摩羅什や玄奘の足跡をいくらかでも辿ることができ、また千数百年に及ぶ仏教美術史を学習し記憶に刻み込むほど十分堪能しました。私は、この「仏教東漸の旅」により益々仏教への帰依を強める決意をした次第であります。この旅を企画し支援を頂いた椎名老師はじめ幹事の皆様にあらためて感謝申し上げます。

「仏教東漸の旅」印象記

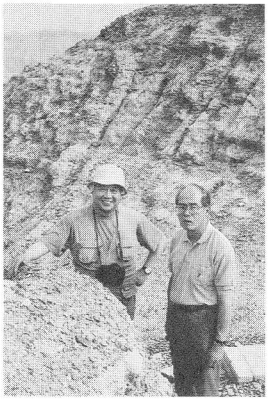
さいたま市　美川　武弘

今回も参禅会の有志の皆さんとご一緒に「仏教東漸の旅」へ参加できたことを心から喜んでおり、また、このような機会を与えてくださったことを感謝しています。

この「仏教東漸の旅」は、中国本土西北部に位置する甘粛省の西端の敦煌から、西域の新疆ウイグル自治区のトルファン、クチャまで、各地に残された貴重な仏教遺跡を巡る旅でした。

往昔の敦煌は東西の交易の拠点であっただけでなく、仏教東漸の中継点であり、西からの鳩摩羅什、東からの玄奘など歴史的な高僧も、皆この地に足を停めたといわれている。その後、敦煌は莫高石窟寺院の造営によって仏教文化が集約され、仏教聖地として、その名を馳せたことは周知のとおりです。

敦煌では、郊外の楡林石窟巡りからこの旅は始まった。楡林窟は敦煌に隣接する甘粛省安西県の西南にある楡林河両岸の絶壁に造られた石窟群で、万仏峡とも呼ばれている。この石窟群の最初の建造年代は不詳であるが、隋代あるいは初唐の頃の開削と考えられている。楡林窟は莫高窟に比較して、洞窟の数およびその規模において及ぶべくもないが、石窟の建造様式や壁画の内容、そしてその芸術性において、多くの独自性を有している。また、その芸術的な特徴が同時期の莫高窟の作品と類似していることから、楡林窟は敦煌石窟芸術にとって重要な一部をなすものであると考えられている。窟内壁画は損傷も少なく、比較的良好な状態で残っていた。



次の目的地トルファンでは、久し振りに晴天に恵まれた。この地では、崩れ残った城壁と街跡のみが残る高昌国の城跡と同時代の貴族が埋葬されているアスターナ古墳、そして二つの河に挟まれた高台に残された交河故城の遺跡を参観した。

高昌故城は漢族の麹嘉が、五世紀末に建てた高昌国の城跡で、のちに玄奘三蔵もこの地に立ち寄って講義をしたといわれている。しかし、その直後には唐によって滅亡の途をたどった。

交河故城は前漢の時代、車師前国の国都として栄えた都市で、玄奘三蔵一行もここを訪れ、一夜を過ごしたとされている。元代にはさびれ、今ではその面影もなく、赤褐色の大地の中に住居跡だけが残っている。両遺跡とも、えもいわれぬ寂莫感を漂わせている。その他、受難の遺跡といわれるベゼクリク千仏洞石窟寺院、その谷間の緑のオアシス。赤い山肌の灼熱の山、『西遊記』の舞台で有名な火焔山などの風景は、今でも鮮明に脳裏に刻み込まれている。

トルファンの代表的な産物の一つが葡萄であることを知った。葡萄畑を潤しているのは天山山脈の雪解け水で、耕作はカレーズと呼ばれる灌漑設備（地下水路）を頼りにしている。葡萄は東西の文化交流のシンボルともいわれている。

西域から中国に伝えられた葡萄は、生の果物としては遣唐使船で運ばれてくることはなかったが、

奈良時代の正倉院宝物の美術、工芸の装飾文様の中に葡萄唐草文が見られ、デザインとしては早くから日本にもたらされたようだ。

最終の目的地クチャへは南彊鉄道の夜行列車を利用した。早朝に到着したクチャでは、朝食もそこそこに、直ちに郊外の渓谷に開削された唐代の石窟群、クズルガハ千仏洞、そして亀茲国の貴重な仏教文化遺跡が残るキジル千仏洞の参観へと出かけた。キジル千仏洞では、亀茲の高僧、鳩摩羅什の座像が我々を出迎えてくれた。乾きった大地にたたずむ最大規模の亀茲国有名仏教寺院・スバシ故城の遺跡も印象深いものがあった。

宿舎の庫車賓館では、仏教心理学〈唯識〉に詳しい安本氏の講義を拝聴した。「すべての物事は、それ自体存在するのではなく、それを認識する人の心の働きによるものである」とする考え方が唯識論の基本だそうだが、正直なところ私には大変難解でした。

わずか数日間の乾燥アジア地帯の旅でしたが、緑の山々に囲まれ、野には田園が青々と広がる日本、その美しい自然と穏やかな気候に育まれている我々は、日常の生活では容易に自然の厳しさには気づかないものです。しかし、一歩、乾燥の世界に踏み入れてみると、そこには想像を絶する砂と人との戦いがあることを思い知らされました。もちろん、それは現在でも続いている。目の当たりにそれに接してみると、我々はどれほど恵まれた生活を楽しんでいるかを、しみじみと感じさせられた旅でもありました。

（杉浦　上太郎氏）

龍泉院参禅会簡介

一、**日　時**　毎月第四日曜九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）四月は八時半より坐禅作法指導

一、**坐　禅**　第一炷　口宣、坐禅三〇分
経　行　一〇分
第二炷　坐禅三〇分

一、**講　義**　木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『**正法眼蔵**』の提唱を聞く。一月より「行持」上巻

一、**座　談**　自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、**参加資格**　年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、**会　費**　無料

一、**成道会坐禅**　月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜（本年は一二月九日）釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする

一、**一泊参禅会**　六月上旬、七炷の坐禅をし、ご提唱を聞く

―沼南雑記―

参禅会記録（　）内は座談の司会者

平成一三年

●四月二二日　三一名
（添田　昌弘氏）
坐禅・禅講後、筍掘り

●五月二七日　二七名
（寺田　哲朗氏）

●六月二四日　三一名
（美川　武弘氏）

●六月二九日～七月一日　二九名
北陸祖蹟参拝研修
幹事　安本小太郎氏
五十嵐嗣郎氏

●七月二二日　二六名
（大坂　昌宏氏）

●八月二六日　二七名

●九月三〇日　三三名
（久光　守之氏）

▼アメリカで世界を震撼させる大事件が起きた。テロ撲滅の戦いが始まり戦禍は拡大している。アラーを唯一神とするイスラム過激分子が殉教者となる時、罪なき人々が殺され、その報復によって難民の大量発生、飢餓、疫病といった悲惨な図式が現実となった。信仰はどうあるべきなのだろうか。

▼シルクロードは仏教の来た路。玄奘三蔵が徒歩で何年もかけて往復した路を、参禅会のメンバーが飛行機とバスでたどった。思考を変えてしまうほどの荒涼とした岩山と乾ききった砂漠。脚下照顧とは自ら視点を変えよということだが、いい旅は身を包む空気が自分というものを教えてくれる。

▼龍泉院最大の行事、施食会が八月一六日実施され、道友一名に準備、交通整理などお手伝いただきました。有り難うございました。

▼今年は参禅会発足三〇周年の記念の年。今年の一泊参禅会は六月に二泊の北陸の古刹を巡る研修の旅となり、一一月三日には在家得度式を控えています。そのため『明珠』の内容を変更し、年末に特別記念号を出す予定です。（佇泉）

●発　行／天徳山龍泉院　千葉県沼南町泉81　☎0471(91)1609
●印　刷／岡田印刷株式会社　柏市高田1116―45　☎0471(43)3131